



22062039

JAPANESE A2 – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A2 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A2 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Monday 22 May 2006 (morning)
Lundi 22 mai 2006 (matin)
Lunes 22 de mayo de 2006 (mañana)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Section A consists of two passages for comparative commentary.
- Section B consists of two passages for comparative commentary.
- Choose either Section A or Section B. Write one comparative commentary.
- It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- La section A comporte deux passages à commenter.
- La section B comporte deux passages à commenter.
- Choisissez soit la section A, soit la section B. Écrivez un commentaire comparatif.
- Vous n'êtes pas obligé(e) de répondre directement aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le souhaitez.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- En la Sección A hay dos fragmentos para comentar.
- En la Sección B hay dos fragmentos para comentar.
- Elija la Sección A o la Sección B. Escriba un comentario comparativo.
- No es obligatorio responder directamente a las preguntas de orientación que se incluyen, pero puede utilizarlas si lo desea.

問題 A か問題 B のどちらかを選び、答えなさい。

問題 A

次の二つの文章について、共通点・相違点・主題を分析し比較しなさい。またその際、筆者が自分の考えを伝えるために用いている文の構成・語彙・言葉の象徴するもの・文体などの要素を考慮に入れなさい。この二つのテキストの終わりには設問がありますが、設問に直接答える必要はありません。この設問を、単にコメントリーを書きはじめる手がかりとして用いることも可能です。

テキスト 1 (a)

四つか五つか忘れた。とにかく、秋の夕方^{ゆづり}の事だった。私は人々が夕餉^{ゆづり}のしたくでせわしく働いているすきに、しも手洗場^{ちゅうせんば}の屋根へ掛け捨ててあった梯子^{はしご}からだれにも気づかれずに一人、母屋^{おもや}の屋根へ登っていった事がある。棟伝^{むねつた}いに鬼瓦^{がわら}の所まで行って馬乗りになると、変に快活な気分になって、私は大きな声で唱歌をうたっていた。私としてはこんな高い所へ登ったのは初めてだった。ふだん下からばかり見上げていた柿の木が、今は

5 足の下にある。

西の空が美しく夕ばえている。鳥^{からす}がせわしく飛んでいる……

まもなく私は、

「謙作。——謙作」と下で母の呼んでいるのに気がついた。それは気味の悪いほど優しい調子だった。

「あのネ、そこにじっとしているのよ。動くのじゃ、ありませんよ。今山本が行きますからネ。そこにおとなしく

10 いるのよ」

母の目は少し釣り上がって見えた。ひどく優しいだけ^{ただ}仕事でない事が知れた。私は山本の来るまでに降りてしまおうと思った。そして馬乗りのまま少しあとじさった。

「ああっ！」母は恐怖から泣きそうな表情をした。「謙作はおとなしいこと。おかあさんの言う事をよくきくのネ」

15 私はじっと目を放さずにいる、変に鋭い母の視線から縛られたようになって、身動きができなくなった。

まもなく書生と車夫との手で私は用心深くおろされた。

案のじょう、私は母からはげしく打たれた。母は興奮から泣き出した。

母に死なれてからこの記憶は急にはっきりして来た。後年^{こうねん}もこれを思うたび、いつも私は涙を誘われた。なんといっても母だけはほんとうに自分を愛してくれて、私はそう思う。(志賀直哉『暗夜行路』1938年)

(注) 志賀直哉(1883-1971)小説家。『新版志賀直哉全集』全22巻。代表作に『城の崎にて』『和解』『暗夜行路』がある。

テキスト 1(b)

こころの風景

私が何をしでかしたのか、今ではもう覚えていない。ともかく烈火のごとく怒った母は私を細引きで庭の柿の木に縛り付けた。私が子供の頃、家には柿の木が五、六本あった。そして梅雨前後には青い柿の実がぼたぼたと落ちて、そこらじゅう変に蒸れたような匂いがたちこめていた。私はわめき散らしながら、反面、頭の隅でこれは大変な事になったと思った。というのも、いつもこういう場面になると、どこかから現われてきて、必ず私

5 をなだめ涙を前掛けで拭いてくれ、母親にとりなしてくる大祖母が留守であることに気がついたのだ。絵心でもあれば雪舟のように涙で地面に絵でも描いたろうが。

まわりは茂った柿の葉陰でいやに薄暗く、おまけに天気の良い日で(大体そういう日に限っては母は癩癩玉を破裂させた)、今にも雨が降ってきそうだった。自分のしたことを棚にあげて、私は不幸な自分の身の上を嘆いた。そして、その頃の愛読書だった『海の子ロマン』を思い浮かべ、自分も自由に世の中に出ていくときがきたと悟った。もともときつく縛ったわけでもない細引きなど、簡単にほどける。ほどけるのをほどかないで、じっと反省させるのが母の目的なのだから、自由の身になるのは至って簡単だった。自力で脱出し、すつくと庭に立った私は二階の物置に身を潜めるべく、柿の木によじ登り始めた。運が悪かったのだろう。木の中程の高さまで来て、突然柿の木の枝が折れた。私の悲鳴に母が飛び出してきた。今でも時々腰痛に悩むのはこのときの怪我が原因だろうか。(大嶽秀夫 朝日新聞 2003年5月19日)

10

(注)

大嶽秀夫(1943-) 京大教授。

細引き……着物の着付けに用いる紐。

——二つの文章の中の母と子の関係はどのように描かれていますか。

——二つの作品の子供はどのような点で異なっていますか、また、どのような点で似通っていますか。考えるところをのべなさい。

——二つの文章の表現上の特色を述べ、それがどのような効果を持っているか、比較してその違いを述べなさい。

問題B

次の二つの文章について、共通点・相違点・主題を分析し比較しなさい。またその際、筆者が自分の考えを伝えるために用いている文の構成・語彙・言葉の象徴するもの・文体などの要素を考慮に入れなさい。この二つのテキストの終わりには設問がありますが、設問に直接答える必要はありません。この設問を、単にコメントリーを書き始める手がかりとして用いることも可能です。

テキスト2(a)

出産時、ぼくは母親の胎内からなかなか出てこない子供だったらしい。今でも思い当たることがある。ぼくは生まれながらにして出無精^{でぶしょう}だったのだ。

一人で仕事をするようになってからの数ヶ月間は、出無精に拍車^{はくしゃ}がかかって、連日、部屋の中にももってばかりだった。髭^{ひげ}も剃らないし、服も適当に選んでいた。それで最初は全然平気だったけれど、しばらくするとモンモンとしてきた。

これはいけないと思って、ぼくはとりあえず、いや、必要以上に、身だしなみを整えることにした。顔を洗って、髭を剃って、髪を整えて、その日の気分で服を選ぶ。鏡の前に立って、うん、まあまあかな？と思えるまで服を選び直す。誰かと会う用事がなくてもそうすることで、一日は別のもに変わっていく。お気に入りのTシャツ。買ったばかりのコットンパンツ。自己満足できるコーディネート。自分から誰かを誘いだして、どこかに出掛けたくなくなる。

格好^{かっこう}ばかりつけていると、バカみたいに思われがちだけど、ひとは適度に着飾ることで、なんだか楽しい気分になれる。ファッションにはそのひとの内側まで変えてしまう力がある。自分をよりよく見せるために、自分に対してハタリをかましているうちに、中身までよくなったような気がしてくる。それはマヤカシであって、マヤカシではない。心の持ち方一つで、ひとは理想的かつ健康的な自分に近づくことができるのだ。

心の乱れは衣服の乱れ。その裏返しと逆療法があることを、ぼくはときどき忘れてしまう。そしてまたふつふつと思出す。中身と同じくらい外見は大事で、まずは格好をつければ気分も好転するということ。 (鈴木清剛 「マヤカシの真実…モードの風」朝日新聞 2004年7月23日)

(注)

鈴木清剛(1970-)作家。代表作に『ロックンロールミシン』がある。

拍車がかかる……物事の進行に一段と力を加える。拍車は、乗馬用の靴のかかにとりつける金具。

マヤカシ……ごまかし。あざむくこと。

テキスト 2 (b)

さきごろ、私は『刺す』という小説を書いた。それを読んだという人から手紙をもらったが、その大部分は女の人からであった。(中略)

一週間くらい前に、また手紙が来た。「先生の『刺す』を読んで、感動いたしました。でも、私はあのよ
5 ような心境には決してなれません。何度読み返しても、そのことは納得が行きません。実は私も先生と同じ
ようなことで、良人に捨てられました。もう一度、良人のもとに帰れなければ生きてはいられません。い
え、いま、たったいま、死んでしまいたい気持ちでございます。」ということを綿々と書いている。書き方
が誠実で、私にはその人の気持ちはよくわかる。

しかし、私は返事が書けない。返事を書くと、間違われやすいからだ。その翌日、今度は電話がかかっ
て来た。私は大きな声をして言った。

10 「良人を愛していたからと言って、それで恩に着せてはいけません。愛したことであなたは得をしたので
す。良人がよその女と一緒にになったからといって、決して追いかけてはいけません。さア、一番良い着物
を着て、表へお出なさい。まず美容院へ行って、きれいに髪を結ってごらんなさい。」

その女の人はどうなったか分からない。しかし、たぶん、決して死んだりはしなかったろう。たぶん、
今日あたりは美容院へ行って、きれいに髪を結っているかも知れない。(宇野千代「一番良い着物を着て」、

15 『親しい仲』1966年)

(注)

宇野千代(1897-1997) 小説家。代表作に『色ざんげ』『おはん』がある。

『刺す』……夫との離婚にいたるいきさつを素材とした小説。1966年刊。

良人……おっと。夫と同じ。

- 二つの文は、それぞれどのような読者に向けて書いていると思いますか。
- 二人の書き手は、服装や髪型など外見についてどのように考えていますか。
- 二つの文は、心と形の関係をどのように語っていますか。